

學見つれて幼児

(エクスカーション)



幼稚園女子大の水茶会

子 杏 本 宮



幼稚園の庭に遊ぶ子供達の心も先生の心も、うら／＼と、何かじつとしていられない氣持に誘われる。そんな日のつゞく或る日、私は近所の街のエクスカーションを計畫した。

連れて行きたい事は、組のあの子もこの子も、全部つれて行きたい。しかし、あの乗物の往來の激しい道路の事を考えると、どうしても、何回にも分けて行くより仕方がない。その日は組の女兒を四人と男兒を二人つれて行く事にした。おとなしい子供ばかりなら七人、或は八人位までつれて行けるけれども、少しおはねさん達となると、せい／＼五人位までである。隣の組の先生に、私の出かけたあと、隣の組の先生に、靴をはきかえる。出かける子供達は、何かふだんと違うので、嬉しがつてはしやいでかけまわる。そこで先生は、門を出る前に、六人の子供をよびよせる。

「門を出ると、自動車や電車が澤山通

つて危いのよ。氣をつけてね。」

と一言、まじめな顔つきでいうと、とび上つていた子供達も急に現實にかえつて神妙になる。ふざけやすいAちゃん、落つたM子ちゃん、比較的亂暴なT子ちゃんは、おとなしいU子ちゃんと二人ずつ手をつながせる。注意深いS子ちゃんとしつかりしたY子ちゃんを先頭にして、氣をつけて歩く事を注意する。

☆

門前の道は、歩道車道の區別がないので、門を出ると對面交通の爲、どうしても道路横断をしなければならぬ。一臺の都電をやりすごした後、無事六名をむかい側へわたすとほつとして思わす笑顔となる。緊張が一つとけて子供達もすぐ、おしやべりを始める。

「あら、お洋服屋さん。」

と、女の子が聲を上げる。

「澤山きれがあるのね。ね、先生、あの色、ほら私のお洋服と同じね。」

「あら、あのきれは、うちのおかあさまのお洋服と同じ色だわ。おかあさまは青い色がお好きなのよ。」

「私、花子さん(きせかえ人形)に、あそこにかゝつているようなお洋服をつくつてあげようかしら。」

てんでに勝手な事をしやべりながらみている。口が忙しくなると、つい注意がそれで、自轉車にぶつかつては大變と、先生は先になり後にまわり、それとなく注意をしながら歩く。ふらふらとすぐ手をはなして、とび出しそくなTちゃん、家の軒下の側とかわらせる。

☆

そのうちSちゃんが「あらあら」と立ちどまる。皆一せいにTちゃんとの視線を追うと、びかびか光つた靴がならんでいる靴屋さんのしきいの上にかわいい眞黒な小猫がちよこんと坐つてこちらを見上げてゐる。Sちゃんは、いきなりばたばたとかけ出して小

猫を抱き上げる。UちゃんもYちゃんもAちゃんも、とんでいつて、

「ね、次は私に抱かせてね。」

「その次は、僕の番ね。」

猫は皆の胸にかわるがわる抱かれていやがりもせず、のどをごろごろとならしている。鈴がちり／＼となつてかわいらしい。皆の喜ぶ聲が大きいので、店の中から、お客さまかしらと、あわててエプロンで手をふきふき出てきたおばさんが、思いがけないこの光景をみて、

「あら、まあ、おほほほほ」と笑つた。

お米の配給所などは、子供の興味をあまりひかないらしい。氣もつかずさつさと通りすぎようとする。先生が

「この店、何するお店」と何氣なく問うと、はじめて氣のついたような顔で、店の中を眺める。普通

のうりやさんとは、ちよつと様子がかわつてゐる。大きなかりが、どさり

とおいてある。大きな袋が天井にとどくほどつんである。その他には机が一つ。机の前におじさんが一人、ぶあいそうなかおでペンを走らせてゐる。

「あ、知つてる。お米の配給所。ね、先生。」

「そうだ、そうだ。僕いつか、おかあさまとおうちの近くの配給所へ行つたことある。」

メリケン粉の袋については、

「トラツクではこんできたんだね」「どこから来るの、先生。」

という質問につゞいて、お百姓さんがこしらえて下さつた小麦が、みんなのお家へいくまでの経過などを話し合

う。「それから、アメリカから来るおこなもありますね、先生」

などという子供も出てくる。

☆

本屋さんには、角帽をかぶつた大學のお兄さん達が立つて、むづかしい本

をみていらつしやる。みんなのみるよ
うなきれいな繪本もならんでゐる。そ
のおとなりは床屋さん。眞白い上つば
りのおじさんが、椅子にすわつた男の
人の髪を、はさみをしやき／＼ならし
てかつて上げている。くる／＼とま
いた紅白黒のねじりあめのような看板に
子供達は氣がついたかどうか。

や、おやさんには、季節の野菜が、新
鮮な色で美しくならんでゐる。子供の
見わけられるものだけでも、ねぎ、に
んじん、だいこん、キヤベツ、ほうれ
んそう……と數えてみると相當ある。
たべたことはあつても、その名前を知
らなくて尋ねる子、家庭菜園の話をし
出す子、野菜なんてきらいだという子
それから、にんじんの好きならさぎさ
んにまで子供の話はのびていく。先生
も會話に加わりながら、新鮮な野菜を
たべなければいけないこと、たべもの
にはすききらいをいわないことなどを
お説教に流れぬようそれとなく話して

きかせる。

あまり店の前に長く立止まつてい
るもおじやまと、きり上げて歩き出す
と、街角のたばこやさんから流れてく
るラジオの音楽の輕快なリズムに、子
供たちの足なみが、ひとりずつ合つて來
るのも氣持がいい。

☆

たばこやさんの角を曲ると、一番に
時計屋さんが目にはいる。大きな時計
小さな時計、桂時計、置時計、懐中時
計……

「ずいぶんいろんな時計があるのね。」
と、子供達も今更のように感歎の聲を
出す。もう時計の見方を知つていて、
「小さい針が上へいつたらおひるのお
べんとう。三時のおやつはこつちで、
十時はこゝ」

などと、得意になつてお友達に説明し
て上げる子供もいる。「かつちんかつ
ちん、時計屋の時計。」と、一人が小さ
な聲でうたい出すとみんながあとから

うたい出す。時計屋のおじさんは澤山
の時計の中にうすまつて、片方の目に
小さな目がねをはめて、わきめもふら
ず、小さなビンセットで時計の機械を
いじつてゐる。

時計屋さんのむかい側は郵便局。是
非行つてはみたいけれど、又乗物の行
き來の激しい道を往復とも横斷する事
を考えると心配でもあるし、先日の郵
便局ごつこの時にも見學したばかりな
ので、その時の事など思い出しながら
話し合ひだけにとどめる。

話しをしてゐるうちに、氣の早いA
ちゃん、もう時計屋さんの隣りのお
もちややさんのをぞきこんでゐる。ジ
ーブ、きかんしや、こま、シヤベル、
かばん、なわとび、お人形……。思わ
ずM子ちゃん、美しいビーズ玉の箱に
さわりかけて、

「さわつちやいけないのよ」
とお友達に注意される。
「わあ、ビートルだよ。すごいなあ」

男の子は興味はどかくこういうものにひかれやすい。ピストルが悪いのではないが、ピストルやがてはギャングごつこに發展しないものでもない。そこで先生が、

「あら、切符切りがあるのね」というと、U子ちゃんが、

「バスのしやしうさんがもつているのね、あんなの」という。

「幼稚園に一つ買つていまましようか」

先生が提案すると、皆目をくるくとして輝かせる。もう、バスごつこを始めるつもりで

「僕が車掌だよ」

「僕もなりたくない」

という事から、切符もこしらえなくちゃ。かばんもいるよ。と子供の計かくは先から先へとのびてゆく。計かくすると、せつかちなのが子供の常であるさつさと、今来た時計屋さんの方へとひき上げる。

☆

十字路を幼稚園の側に横断する前に町角で、ちよつと立ち止る。消防の火の見やぐらがみえるからである。指でさし示すと、すぐ

「あ、あれ消防ね」

「消防のおじさんがのつかつているのね」

「僕も上りたいな」

などと口々にいう。消防のおじさん達は、晝間ばかりでなく、夜もみはつていて、火事かあるとすぐとんで来て消して下さる事などを話しあう。

「赤い消防自動車、ウーウーウー」

と口まねしてりきんでいる子もある。

この十字路から一方の道はG寺にむかつて下り坂になつてゐる。はるかにG寺の森をのぞみながら、子供と話し合う。G寺へ行つて鳩と遊んだことのある子供もあつた。霞のかゝつていない日には、G寺の森のはるかな空に、富士の姿がみえる事もある。

十字路の中央に立つたおまわりさんは、ビーと大きく笛をならして、派手に両手をひろげる。今度は、横断道路を落つてわたる。みんながわたりおわるまで、おまわりさんはこゝくつていて下さる。みんなもこゝくおまわりさん、ありがとう。

☆

歸りはとかく気がゆるみやすい。危いから氣をつけてね、と聲をかけながら、歩く。大きな自動車、とりわけてわき道から出てくる自轉車などに注意する。

きれいなあめのならんだおかしやさん。赤や黄色のリボンの下つた小間物屋さんの前などで、子供の歩調はゆるくなる。

やつと幼稚園の門までたどりつくと緊張から解放されて、子供達は、ばたばたとかけ出す。幼稚園で待つてゐるお友達に話して上げたいことが、胸いっぱい、早くくと、とんで行く。